

はじめに

本報告書は、平成 24 年度に岡山大学文学部プロジェクト研究経費を得て実施した共同研究「古代・古典・伝統の発見／創造における表象観念と文化」の研究成果の一部である。

具体的な研究成果の提示に先立ち、研究メンバー、研究目的とその意義および研究活動について紹介して置きたい。

【研究メンバー】

鐸木道剛：哲学・芸術学専修コース

渡邊佳成：歴史文化学専修コース

遊佐 徹：言語文化学専修コース（研究代表）

【研究目的と意義】

近年、中国の街角で、あるいは言説中に「唐装」、「漢服」なる服装や言葉をよく見掛けるようになった。「西装（洋服）」でもなく「旗袍（満州人の服装、チャイナドレス）」でもない漢民族の伝統的民族衣装の意味らしいが、実際は歴史的、文化的根拠に乏しい商業主義やナショナリズムに影響された流行である。

この卑近な例が語るように、「伝統」とは時としてかくも突然恣意的に創られるものでもある。国民国家の形成事業が、近代において多くの「伝統」を創り出す原動力となったことは、ホブズボームの編著作等によってすでに明らかにされてきたことであるが、その他にも近代において「伝統」が創り出されなければならなかった理由、現代において創り出され続けている理由が存在するはずである。加えて、「古代」観念、「古典」意識の形成にも同様の状況を想像可能である。

本研究課題は、岡山大学文学部が有する人的、資料的研究資源に応じる形で近現代の中国、東南アジア、ロシア・東欧における古代・古典・伝統の発見／創造のメカニズムを美術史学、歴史学、文学の立場から総合的かつ個別的に考察することを目指すものである。

【研究活動】

研究活動は個人部分とグループ部分に分かれる。

1、個人部分：

○鐸木

8月29日にベオグラード大学における国際シンポジウム「近代文化：スラブと日本の対話」に参加し、「ナデジュダ・ペトロヴィチと森鷗外：日本とセルビアの物質観」の報告を行い、彼我の表象観念の違いについて考察した。

ダリボル・ヴェリチコヴィチ准教授講演会「家の喪失、世界との和解」（10月29日）および「セルビアにおける日本研究」（10月31日）を開催して、東ヨーロッパ（セルビア）における表象観念と物質文明の現状と、表象観念に無縁の日本についてのセルビアの見え方についての講演を企画した。

また慶応大学における国際シンポジウム「地獄を描く：東西ユーラシアがみた終末」（3月3日）に参加して、キリスト教美術における地獄表象の周縁性を論じた。

○渡邊

東南アジアにおける「古代・古典・伝統の発見／創造における表象観念と文化」を主たる研究対象として、特にミャンマーにおける古代遺跡のユネスコ世界遺産登録に向けての動きに関する表象資料、文献史料の収集に努めたほか、東南アジア（特に、インドネシア、カンボジア、ミャンマー）の文化遺産、美術資料がヨーロッパの博物館においてどのように展示され、東南アジア各国、各民族の古典・古代、伝統像が提示されようとしているのかを調査し、関連する文献の収集にあたった。その成果の一部を、昨年（2011年）の10月に東京で行われた研究会で報告した（10月27日、「東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触」2012年度第4回研究会〔東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所〕、発表題目「10世紀以前ミャンマーにおける諸民族の動向―「ピュー」・「驃」および「モン」を中心に〕）。

○遊佐

8月に大阪市立美術館において、中国古典絵画様式の近代における継承と革新に関する調査を実施した。

また、3月には東京都写真美術館収蔵庫において、20世紀の初頭において外国人の手によって写し取られた中国古代の遺跡、文物の概要を調査するとともに、その写真の再評価を巡って担当学芸委員との間で意見交換をした。また、11月のキャンパスアジア共通善フォーラムにおいて、中国近代の「共通」観というタイトルで古典意識とその革新に関する報告を行った。

2、グループ部分：

文学部から国際シンポジウム開催経費を受け、プロジェクトのテーマとの関連性も重視して、韓国の高麗大学から3人の教員を招いてのシンポジウム「物質観：韓国から見た日本」を開催（3月15日）し、鐸木は「松本竣介：〈もの〉の美から破壊の美へ」を報告し、遊佐は「やまとひめとビクトリア」についての報告を行った。